

家紋ノ由來

二年 黒住美智惠

四〇

家紋又ハ紋所ト稱スル紋章ハ氏族ヲ表ス家門ノ記號ナリ形狀ハ概テ自然ノ形物体ノ形体又ハ器物ニ象リタリ。

又後世ニ至リテ宗教ノ信念ヨリ出デタルアリテ氏族ニヨリテ形狀一樣ナラズ氏族ノ沿革ニ付キテイフモ興廢盛衰アリ、從ツテソノ紋章ニモ變轉錯誤極リナシト雖モ姓氏ト脈絡相連リテ自ラ一家定ノ式アリ紋章ノ始メハ職掌記號ナリト次ハ裝飾紋織紋ヨリ變ジタルナリト、然レドモ其確實ナル起原ニ付キテハ不明ナリ、吾國建國ノ初メハ族制基礎トナリ居タリ故ニ、皇室ニ姓氏ナク姓氏ヲ以テ君臣ノ名分ヲタテラレタリ。

神代ノ頃ヨリ群臣皆其業ヲ子孫ニツタフ、子孫之ヲウケツギ行ク内ニ其名遂ニ姓トナリタリ、而シテコレ等ノ人々其職ヲ奉ジ祖業ヲ治ムルニ當リテ記號トスルモノノ必要アリカノ銚ノ小幡等ニ軀繪シ書キタルハ武器ヲトリタル物部氏ノ記號ニシテ後世武門ノ家ニ幕紋旗紋アルモ又品部ノ遺例ナリト。

推古帝ノ時ヨリ定紋ノ推定アリ性職區別ヲ生ズ。

又弘仁天皇以後皇族ニ姓ヲ賜フ、而シテコレラハスベテ源平ナリ此時スデニ藤原氏ニ藤ノ丸橘氏

ニ橘、源氏ニ龍膽笹平氏ニ蝶ノ紋章アリ又檢非遺使ニ蝶鳩ノツケタル如キハ官職ノ紋章ナリ

源平二氏征伐ノ權ヲ得テヨリ武人之レニ屬シ二氏ノ族漸ク國郡ニ雄タリ此時ニ當リテ幕紋旗紋アリテ諸家紋章既ニ定マレリ。

源平藤橘ノ支派諸國ニ蕃衍スルニ當リテ諸家ノ紋章モ亦大イニ複雑トナリタリ。

又後醍醐天皇ノ御時ヨリ以來功臣ニ菊桐ノ御紋章ヲ賜フ事起リテ臣下ニシテ之ヲ侵スモノ多キニ至レリ。

元治天武ノ頃ヨリ天下亂レ武家ノ興亡常ナラズ。

或ハ家ニ家譜ヲ失ヒテ他性ヲ誤認シ或ハ妄リニ華官ノ姓ヲ侵シ其祖ヲシフルモノ數多カリキコレニヨリテモ紋章大ニ亂レタリ、秀吉天下ヲトルヤ其臣ニ名家ノ用ヒタル紋章ヲ許シテ、ヲ極ム、徳川氏ニ至リテ又然リ、即ソノ臣ニ立派ナル姓ヲ許シ家紋ヲ許ス例開レテヨリ諸家ノ定紋副紋ノ外ニ諸種ノ記標頗ル復雜ヲ極メタリ。

明治維新以後皇族以外ニ菊ノ御紋章ヲ用フルコトヲ停止サレテヨリ、此レニツキテハ嚴重トナリタレドモ同時ニ幕府ノ制一般人民ニ家號ヲ禁ジタリシヲ廢シテ一般ニ氏アラシムルコトトナリテ姓及紋章ハ大イニ亂レタリ。

而シテ裝飾紋トハ古ヘ車蓋、帷簾諸器具等ニ諸種ノ紋ヲ附シ裝飾トシタリ、ソノ古代形狀ノ紋ヲ

世ニ有職紋トイフ。又裝飾紋ハ家ノ紋章以外ニ之ヲ用フルヲ以テ古來タゞ紋ムダ紋等稱セシガ、コレヨリ轉ジテナリシ家紋モアリ。織紋ハ織出シタル紋ニシテコレ又裝飾紋ナリ。上天皇ヨリ下諸臣ノ初位ニ至ル衣袍ノ織紋ナリ。古ハ親王以下ノ衣袍ハ染色ニテ衣階ノ分ヲ織紋ニハ制限ナカリシガ中古以後ニハ更ニ織紋ニモ定制出來タリ。

大臣以上ハコレニ家紋ヲ用フルコトヲ許サレタリ、カ、ル織紋ヨリモ轉ジテ、現今ノ紋ヲ生ゼリ畏レ多キコトナレドモ今皇室ノ御副紋章トナレル五七ノ桐ノ如キモ織紋ヨリ轉ジタルモノナリ、鶴ノ丸ノ紋章等其他其種類甚多シ武門ノ家ニハ幕紋旗紋ノ制アルニ及ビ、本宗支派ヲ分ツニ更ニ紋章ヲエラビ或ハ家ノ創意ニ出デタルモノアリ。葵ノ御紋鶴ノ丸巴等其他ノ紋スベテ以上ノ所説ニヨリテ單ニ菊ノ御紋桐ノ御紋ト稱シテモソノ基ハ一定ナレドモ其變化シタルモノ無數ニシテ現今見ル如クアグルニイトマナシ。

最後ニ宗教ノ信念ヨリ出デタリト稱スルハ中央ニ十字架ノアル紋ニシテコレ又其種類無數ナレドモ總稱シテクルマ書紋ト稱スルモノコレニテ德川氏ノ以前我國ニ於テ一時盛ナル時ニ出來シモノ。ニテ西國地方ノ藩主ニシテ之ヲ用フル家モアリ彼ノ天草一揆ノ爲德川氏基督教ヲ禁ジタルタメ之ヲ憚リテ中頃ソノ起原ニツキテ言ヲ左右スルモノアレドモ其宗教ノ信念ヨリ出デタルコトハ明カナリ。

スベクトルノ研究ニ平行セル毛糸染

技 二 庄 司 榮

問題ニハ特ニ毛糸染メヲ擧ケタレドモ之ハ單ニ一例トシテ毛糸染メヲ用キタノデスベクトルノ研究ニ平行セル染物ト廣ク一般染物ニ適應スルノデアリマス。

サテ私共ガ染物ヲ致シマスニ當リマシテ只染料其儘ヲ使ツテ例合バ赤ノ染料ヲ以テ赤色ヲ染メ黄色ノ染料ヲ以テ黄色ヲ染ムルヤウナ簡單ナルモノナラバコレデ布片トカ糸等ヲ染メマスノニ何等カノ工夫ヲモ要シマセン、然シ此ニ二種アルヒハ三種類ノ染料ヲ交ゼテ何カ變ツタ間色ヲ染メテ見タイト思ヒマス時ニコレトコレトヲ混ズレバ如何ナル色ヲ得ルカ經驗ナキモノニハ一寸想像ガ出來難イノデアリマス。普通ハ混ゼントスル染料ヲ少シ分チ取りコレヲ湯ニ溶シテ然後種々ノ割合ニ交セテ見テ其ノ結果ノ色ノ何色ナルカヲ知ルノハコレハ誰デモ致スコトデアルト思ヒマス此ノ方法デモ大概ハ分ラヌ事モ御座イマセンガ實際染上ツタ時ノ色ガ只肉眼で見タ時ノ色トハ